

# 日本の博物館・世界の博物館

小島郁生<sup>1)</sup>

## 1. はしがき

地質標本館が本年8月19日をもって開館10周年を迎え、ますます隆盛の由を伺い、同じ地質屋の博物館人としてお祝い申し上げたい。ロンドンの地質学博物館やワルシャの地質学博物館、あるいはドラムヘラーのティレル古生物学博物館、モスクワの古生物学博物館のように、日本でも地質学ないしは古生物学のみをうたった独特の博物館が健在であることは、まことに喜ばしい。むろん、例に挙げた博物館は所属する機関や組織がそれぞれ異なっているので、表面上の類似性をもって単純に論ずるわけにはいかないが、思うに、地質学の場合、動物園・水族館・植物園のような類似施設をもたないので、当然博物館展示の主役であってよいのである。

私は国立科学博物館(科博)に外向してから約30年となるが、この間、機会を見つけては、国内外の博物館を見学することに努めてきた。訪ねた博物館数は、国内で約50館、外国で約30館である。この数が1地質学者の経験として多いほうか少ないほうなのか、私にはわからない。いずれにしろ、この経験をもとに私自身が得た知識に基づいて、彼我の博物館のある面での比較を行い、日本の博物館に関する問題提起にまで至ればと思う。議論

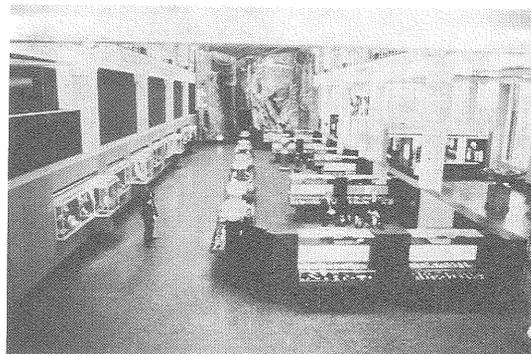


写真2 地質学博物館1階の宝石展示背景は地球物語室の入口

の例題として国立科博が頻出するのは、筆者の勤務先であるため熟知しているからであり、御容赦願いたい。地質標本館にとって他山の石として頂ければ幸いである。

## 2. 研究組織の比較

博物館の展示構成などについては、すでに出版された成書が何種類かあるのでそれらに譲る。私たちは研究者であるので、研究面での検討が重要であろう。しかし研究内容や論文については別問題としておく。日本の地学系博物館としては、おそらく国立科学博物館の地学研究部の規模が最大のものと思われるので、これを日本の例とみなしておく。次に、まずヨーロッパの例として大英博物館(自然史)〔最近、ロンドン自然史博物館と改称〕とフランス国立自然史博物館をとりあげ、日本の科博の規模と比較してみよう。ただし両館ともにその詳細を私が調べたのは1973年の在外研究時であるから、すでにふた昔も前のデータである。しかし残念ながら私はその後のデータを知らない。そこで止むを得ず17年前の両国の実情を現在の科博と比べてみるしかない。

大英博物館(自然史)の組織について注目すべき点は次の通りである。館長直属という形式で、館長代理・事



写真1 ロンドンのエクシブション通りに面した地質学博物館

1) OBATA Ikuwo, 国立科学博物館地学研究部: 〒169 東京都新宿区百人町3-23-1

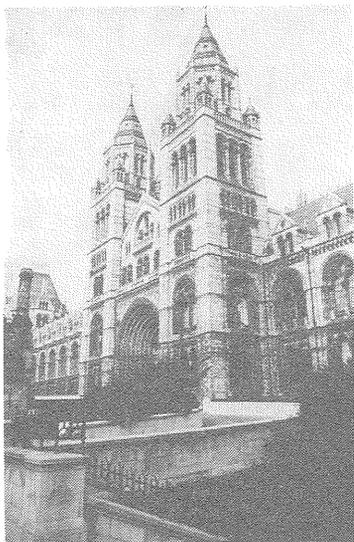


写真 3 ロンドン自然史博物館の正面玄関

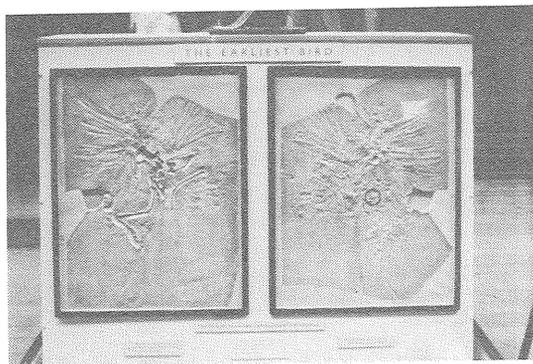


写真 4 ロンドン自然史博物館に展示中の始祖鳥化石

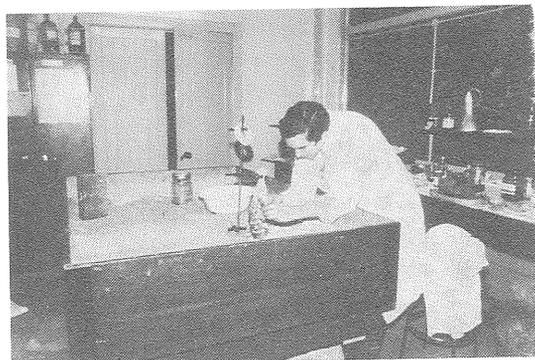


写真 5 ロンドン自然史博物館の剖出整形室にある砂場

務管理長・出版局役員・写真技師長・総括職工長・警視長などが館運営の中核となっている。科博の場合には、出版・写真・職工などの部門が無い。通常サービス局として、生物測定部・中央工場・電子顕微鏡室・走査型電顕室などがある。一般図書館のほかに展示部門と教育部門とが独立している。科博の場合には、展示を含む普及部と教育部だけがある。自然史の学部構成は動物学部・昆虫学部・古生物学部・鉱物学部・植物学部の5部より成る。科博の場合には、動物研究部・地学研究部・植物研究部・人類研究部の4部があって、イギリスと比較すると、動物と地学が相対的に弱体だ。

例として、古生物関係を調べてみよう。古生物学部の構成は合計21研究室よりなり、学部長、学部長代理(2名)、秘書、タイピスト、事務助手などを置く。研究室構成は次の通りだ。両生類・爬虫類・鳥類(3名)、節足動物・筆石類(3名)、石炭紀～完新世腕足類(3名)、カンブリア紀～デボン紀腕足類(2名)、サンゴ・苔虫類(3名)、ウニ類・プロブレマティカ(3名)、魚類(2名)、更新世哺乳類(2名)、第三紀～中生代哺乳類(2名)、頭足類(2名)、後期中生代～第三紀斧足類・腹足類(3名)、古生代～前期中生代斧足類・腹足類(3名)、貝形類・コノドント・海綿・蠕形動物(3名)、藻類・中生代～新生代植物(2名)、古生代動物(2名)、原生動物(4名)、実験室(7名)、図書室(4名)、受付(3名)、古人類(5名)、血清(4名)、このような室構成は、生物の種類の類縁関係とか分類単位の大きさという点で必ずしも統一のとれた区分ではない。むしろ地質時代や化石の産状、研究者の実態を併せて考慮した。極めて現実的なイ

ギリスらしい区分といえる。

これに対し、科博の古生物学部門は地学研究部に所属するが、その研究室構成は、古植物(1名)、古無脊椎動物(1名)、古脊椎動物(3名)、古生物系統進化(2名)と、4研究室7名の研究員である。大英博物館の古生物学部員から人類関係の2研究室9名を引いた残り、つまり18研究室56名と較べると、研究室数でほぼ1/4、研究者(技術者などを含む)数で約1/2ということだ。科博古生物の場合、公務員の定員削減政策が響き、ここ15年間に3名の削減をみている。またプレパレーターや写真技師などはいない。科博全体の図書課も消失している。もっとも、大英博物館(自然史)のほうも近年は、サッチャー政策により、入館料が必要となったり研究費のしめつけが行われ、ここ2年ほど停年退職者の補充が許されず、退職者は無給のまま研究室を使用できるのだという。4月末の情報では、1992～93年までに、現在の780名の職員数から68ポスト削減するという。

次に、フランス国立自然史博物館の例をみよう。パリ古生物学研究所の所員構成は次のようになっていた。博物館研究者：教授2名(古脊椎動物学および古無脊椎動物

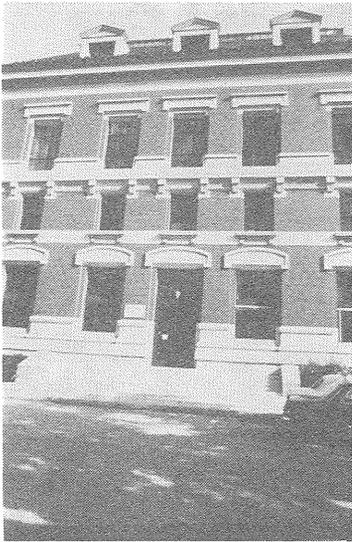


写真 6 パリ古生物学研究所

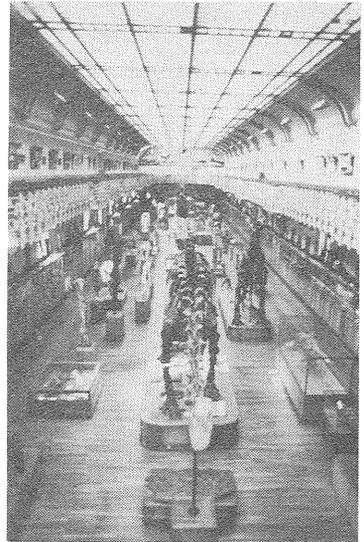


写真 8 古生物博物館内の展示例

学), 古植物学: 助教授 1 名・助手 1 名 (うち女性 1 名), 古動物学: 助教授 1 名・助手 6 名 (うち女性 1 名). 国立中央科学研究所 (CNRS): 教授 3 名 (うち女性 1 名), 助教授 8 名 (うち女性 5 名), 講師・助手 23 名 (うち女性 9 名), 職員 (博物館の非研究者) 15 名 (うち女性 6 名), 職員 (CNRS の非研究者) 15 名 (うち女性 13 名). 要するに, パリ古生物学研究所には博物館職員のほか, 多数の CNRS 職員が同居しているのである. また同研究所にはタイピスト兼秘書 3 名のほか, 技術室に石膏技師 4 名 (うち専門技師 2 名, 助手 2 名), 写真技師 1 名 (研究用と展示用), 描画・製図技師 4 名 (研究用と展示用), 薄片製作技師 1 名が専属である. 要するに 50 名の研究者と 10 名の技術者, 30 名の事務系職員を擁していた. その後, 人員数に若干の変動があったらしく, 1983 年 5 月発行のパンフには, 43 名の研究者, 33 名の技術者と記されている. いずれにしろ, 科博の約 10 倍の数を示す. 17 年前の当時から国立進化学研

究所の設立を企図するなどの努力が古生物学者を中心に行われていた. 1987 年に来日されたフィリップ・タケ館長によると, プレインとして 12 人の若い委員により政策決定を行い, 常時外人研究者のためのポストをいくつか用意するなど, 新機軸を打ち出している.

さて, アメリカの場合はどうであろうか. スミソニアン自然史博物館のように 120 名の研究者, 80 名の訪問研究者を擁する大きな機関のことはよく知られている. しかし, ここではむしろ極めて小さな博物館の実態から学ぶことにしよう. 昨年と一昨年に訪問したモンタナ州立大学ロッキー博物館の場合はどうであろうか. ここは研究者の館長・副館長のほかに, 総計 28 名からなる小世帯で, その中に 5 名のキュレーターが含まれる. そのキュレーターの 1 名に古生物学者がいる. ところが, その古生物学者の研究を専任で手伝うプレパレーターが 4 名, 他のプレパレーターが 2 名だ. 美術・写真関係者が 2

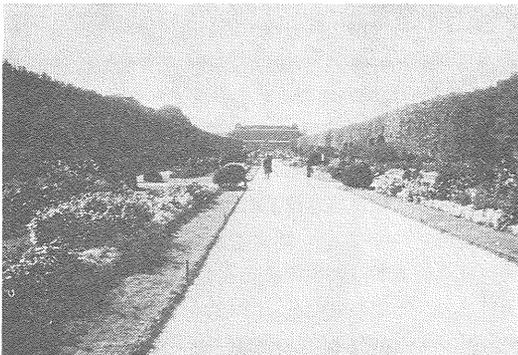


写真 7 フランス国立自然史博物館

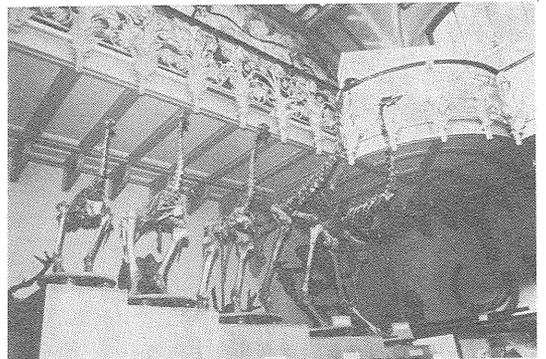


写真 9 古生物博物館内の展示例

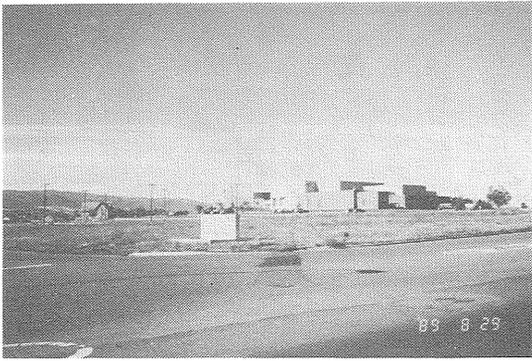


写真10 モンタナ州立大学ロッキー博物館



写真12 ロッキー博物館内の資料庫の一部

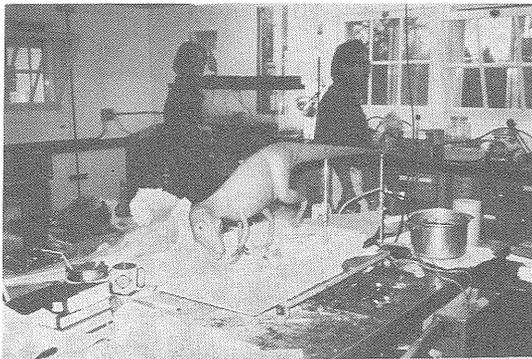


写真11 ロッキー博物館内の工作室

名。ほかに情報調査・開発・教育・展示の責任者がいて、キュレーターを援助して効率的に機能している。科博に7名の古生物関係キュレーターがいるにもかかわらずプレパレーターが皆無という現実と比較すると、ずっと実際のな構成となっている。

### 3. 教育普及活動と研究

この問題を考察する客観的資料の一つとして、平成2年度の科博における教育普及活動等事業計画をみよう。まず青少年科学活動というのがある。科博全体で9コースの募集をし、7月ないしは8月に実施する。この種の行事は今年で5年目をむかえる。次に、青少年科学活動指導者研修というのを実施している。これは、科博全部でコース開設するが、これもやはり今年度で5年目をむかえる。第3に、理科担当教員現職研修（自然史分野別専門講座・自然史総合専門講座）を行っている。これは今年度で3回目、前者は選択コース（6コース）ごとに15～20名を募集し、後者は150名程度を募集する。最後に、教育ボランティア研修というのがある。ボランティアは科博に150名以上登録されており、主に主婦より成るが、

通例2月頃に研修を実施し、各コース2日ほどを使う。以上の研修指導のほか、古くから実施しているものに、教育普及活動というのがある。これには、初級（こどもの科学教室・自然教室など）、中級（自然史教養講座など）、上級（自然史セミナー）などがあるが、今年度の場合、地学研究部は合計33回実施する。次に、特別展・特別展示を毎年実施している。特別展というのは大規模な企画展で、しばしば新聞社等と共催する。今春の大恐竜展は読売新聞社との共催であった。一方、特別展示のほうは小規模な企画展をいう。今年度は科博全体で2特別展・5特別展示が開催される。こういう特別展の準備などに要する時間とエネルギーの消耗は莫大なもので、たとえばアメリカとのFAXや航空便による連絡は、日本からの発信だけでも50回ほどに達するし、研究者が延べ5回のアメリカ出張を行っている。しかし、恐竜展入場者は約70万人に達したから、化石見学者数という視点からは、短期間の普及効果は絶大である。こういう大がかりな展覧会を実施しない年度にも、各研究部で1～2回の特別展示を行っている。なお、以上のほかに、自然史関係研究部の全員に対し、ほぼ1～2ヶ月に1回の割合で、本館たんけん館における走査型電子顕微鏡のオペレーションと観客に対する解説が義務づけられている。また大久保分館には、研究棟・資料棟・研修研究棟があるが、研修棟見学希望者（理科担当教員、青少年教育指導者、理科クラブ等）に対し、随時必要に応じ研究者が解説している。研究者各自は僅かの庁費・科研費で研究を行っているが、自然史関係研究部が協同して23年来実施したものに、「日本列島の自然史科学的総合研究」という事業があって、今年からさらに12年の継続が決定した。毎年科博研究員約22名、大学等研究者6名程度の参加を得ている。また、当館の微化石部門では、国際深海掘削計画（DSDP-IPOD-ODP）試料の保管・活用を担当する世界の7機関の1つとして、珪藻化石の作製・配布を行って

第1表 科博地学研究部研修教育活動（平成2年度）

研修等の種類	テーマ	実施期間	人員	対象
(1) 青少年科学活動				
青少年科学教室	岩石鉱物コース れき・砂・火山灰から地質を探る	7月30日～8月8日	15名	小学4年生 5
青少年科学グループ活動		8月7日～15日	15名	
青少年科学会議		化石コース 木の葉石を調べる	10月28日	
(2) 青少年科学活動指導者研修				
(岩石・鉱物コース)	岩石鉱物を対象とする野外作業の指導の仕方	11月6日～9日	10名	学芸員 社会教育主事 理科教育センター 職員等
	室内作業			
(化石コース)	古環境指示者としての化石	10名		
	化石の処理と標本作製 化石の同定と古環境解析			
(3) 理科担当教員現職研修				
自然史分野別専門講座	岩石鉱物コース	7月25日～27日	15～20名	小・中・高校の 理科担当教員 等
	岩石鉱物の見方	7月25日～27日	15～20名	
	化石コース			
	微化石について、標本作成 化石観察			
自然史総合専門講座 (一部)	恐竜の繁栄と絶滅(講義) 火山の科学(講義)	8月9日	150名	
(4) 教育ボランティア研修	岩石鉱物関係 化石関係	1991年2月頃	100名	科博教育ボランティア

第2表 科博地学研究部普及活動（平成2年度）

普及活動の種類	回数	テーマ例	人員	対象	
(1) こどもの科学教室	3回	小さな小さな化石 古生代の魚の話 日本にいた化石ゾウ	各40名	小・中学生	一面から言う、現代のきびしい世間での必死の生き残り戦略ともいえる。しかし、展示や教育普及は氷山の見せる一角に過ぎないものであって、そのいわば水面下には、収蔵庫に格納された膨大な資料、よく整理・登録・保管された標本類、専門分野別の充実した研究陣、時宜を得た展示と研究を助ける技術陣がなければならぬはずだ。とくに国際動物命名規約や植物のそれに勧告されているように、学問上記載されたタイプ標本の充実・管理の行き届いていることが前提となろう。
(2) 自然教室	1回	河原の石の観察会			
(3) 自然史教養講座	24回	鉱物観察会	50名	中学生以上	
		岩石の見方	15名	高校生以上	
		地層と化石の観察会	40名	中学生以上	
		鉱物学講座	50名	高校生以上	
		鉱物岩石観察会	50名	中学生以上	
		地球の話	30名	〃	
		鉱物の性質と鑑定法	30名	高校生以上	
(4) 自然史セミナー	5回	古脊椎動物研究法講座 哺乳類	15名	大学生以上	
小計	33回				
(5) 特別展・特別展示	3.10.～ 5.27. (79日間)	大恐竜展－モンタナ州立大学 ロッキー博物館コレクション－		一般	
(6) 走査型電子顕微鏡	84回	オペレーションと説明		一般	

おり、外国との相互利用の微化石レファレンス・センターの役割を負っている。研究者は、毎土曜日に大学の非常勤講師を勤めたり、教育委員会等から講演の要請を受けたりするが、私の場合後者は月に1回程度である。

#### 4. 博物館の機能と現状

展示や教育普及活動について詳述してきたが、これは1990年7月号

このような点で、日本の博物館を欧米の主要博物館と比較すると、あらゆる点で見劣りのすることは否めない。欧米のように標本蒐集の長い伝統と広大な敷地をもつわけではないので、日本の博物館のもつ標本資産と収容能力には限界がある。広い敷地を獲得することができないのならば、フランス国立自然史博物館のように、将来は地下資料庫を企画していくしかない。標本類の整理・登録・保管については、科博でもジャンルによる遅速

はあっても、従来の台帳原簿からパソコン使用に全体として移行しつつある。

次に、欧米主要博物館と比して研究陣が劣勢であるという実情については先述した通りである。大学で自然史の研究が衰退しつつある今日、また28年前に学会の勧告により自然史センターとして再発足した科博研究部の初心を思う時、今後よほど活性化の工夫が必要である。後継者の育成については、従来も非公式ながら、科博の研究部でドクターアルバイトや大学院課程の研究を行ったり、卒論指導を受けたりして育っていった研究者がかなりいる。こういった事情を合法化するためには、たとえば連合大学院制度の中に科博を組み込んで、法律の擁護のもとに自然史の後継者を維持するというような方策を考えておくべきであったろう。現行法のもとで、とりあえずは、科博の特別研究生制度を活用し、毎年各研究部2名以内で大学院修士・博士課程在籍者を受け入れていくという実績を重ねつつある。このように、科博研究者の場合には、小・中・高校生、大学生、大学院生、社会人等すべての階層を対象にした教育普及活動を実施している。

博物館の技術面については、日本の場合、展示業者や輸送業者、あるいは彫刻家グループなどが受け持つのが慣例となってしまった。博物館技術者数に関しては、自然史センター発足時に比して、完全に退化している。諸外国と違って、博物館に工場が無く、1名のプレパレーターもいないというのは異常である。事実上は、研究者自身がアルバイト（技術補佐員）とともに何とかやっている。打開策の一つとして、現在では、資料・技術・研究それぞれのボランティア制度を検討中である。

## 5. 日本の博物館の問題点

日本にある国立の博物館だけを扱ってみても、法制上はさまざまであることが知られている。国立民族学博物館や国立歴史民俗博物館のように国立大学共同利用研究機関で、国立学校設置法のもとに特別会計、学校教育法を基本法とし、研究者には教育職給与表が適用されるところがある。

一方、地学を含む唯一の国立の博物館である国立科学博物館は、独自の設置法のもとに一般会計、社会教育法を基本法とし、研究者には研究職給与表が適用される。予算総額が大蔵省からトータルとして文部省に委され総額内の重点配分が文部省に委されている特別会計とは異なる。一般会計であるから、予算獲得は個々のものについても文部省だけではなく、大蔵省の関係当局を納得させるだけの十分な理由がなければならない。従って今日

のように経済情勢が一段と厳しくなると、もろにその影響を受けるのである。

諸外国の博物館と科博を比較した時、教育・普及活動が科博では極めて活発であり、その実質面を研究部が担当している反面、標本・技術・研究という肝腎な点が弱体であることに気付かれるであろう。一般会計であるうえに、外国のように寄付行為への税制優遇措置がないので、経済大国という外見に比して、自然史研究の実態は貧困と多忙をきわめている。他方、世間の需要というものがあるが、現在の国立科学博物館に対する社会的期待は大きい。すると、文化先進国なみの実力をもった博物館を要望するならば、国立大学共同利用研究機関としての国立自然史博物館の新設を考えるしかないのではないだろうか。

近年は日本の各地で博物館ないしは博物館相当施設がつくられつつある。ひとつには、県や市町村など地方自治体の文化政策というものがあるが、それが選挙がらみの公約実現とつながっていくせいかもしれない。これら博物館には、いわゆる博物館法が適用され学芸員がおかれなければならない。最近の傾向として、伝統的ないわば静的な展示だけでなく、体験学習室をふやすとか、視聴覚機器を活用した動く展示というようにモダンな遊びの要素を加味したもの、子供たちが自ら手足を動かして楽しめるものというような性格を含んでくるようになった。これはアメリカを初めヨーロッパ各国の傾向なども符合し、役立たずを博物館行きと称した旧観念を一掃し、その時代的意義を確立するためには歓迎すべきことであろう。しかし、ここでも忘れてはならないこと、というよりはむしろ博物館の本質にかかわる問題として、メンテナンスに注意しなければならない。絶えず資料を蓄積し整理すること、研究を続けること、それに少々の技術的事項は博物館自らの手で処理できる組織をもたないことには、博物館活動の活性を維持できないし、博物館が市民に飽きられることになることが目に見えている。

20世紀に入って、近代科学の中で還元主義が主流になるにつれて、自然史研究の活力の低下が指摘され始めた。日本では研究の歴史も浅く、宗教や伝統から受ける拘束が少ない。私たちはむしろこの環境を生かし、自然史博物館の機能を現代的に構成し、文化の拠点として自然史を再生することができよう。自然史のようないわば広く精神文化や学問の基調をなす科学については、経済力や工業力の発展とかけ離れて、不均衡に軽視されてきたというのが日本の実情であった。このような点の是正を図ることが、21世紀に向けて、国際社会での日本への信頼を増すことにもつながるのではあるまいか。

<受付：1990年5月1日>